3歳児たんぽぽぐみ事例

「すぐに助けてください！」

泉　紗恵

－子どもの安心・安定から広がる遊びー

（1）「子どもの声」をもとにした事例協議

①保育のねらいの共有　②事前の環境構成の意図の明確化と共有化

事例　**1学期**

保育者は、初めてで不安もある幼稚園生活の中で、子どもたちが好きな遊びを見つけ、安心して幼稚園で過ごしてほしいと考える。

子どもたちは、少しずつ一人ひとりが好きな遊びを見つけて、楽しむ姿が見られるようになる。実際の事例にも出てくる電車遊びもその一つで、繰り返し遊びを楽しんでいる姿がある。

事例　**9月2日（木）**

夏休みが明け、２学期になると、子どもたちは１学期に作った楽器に触れたり、育てていたトマトを観察したりしながら過ごしている。久しぶりの幼稚園での生活に少し緊張する様子もあったが、一学期の生活を思い出しながら、徐々に生活リズムを取り戻す子どもたちの姿が見られる。

① 保育のねらい

安心できる環境の中で、好きな遊びをのびのび楽しむ。

② 事前の環境構成の意図

電車遊びのコーナーをはじめ、その他のスペースも一学期と同じ環境構成にしながら、繰り返し遊んでいる遊具を用意し、子どもたちが安心して遊べるようにした。電車遊びのコーナーでは、子どもが普段使っている数の電車、車、線路などを用意し、ブロックもあわせて用意しておく。

また、じっくり遊べるコーナーにするために、乗り物や道が描かれているマットを敷いておく。

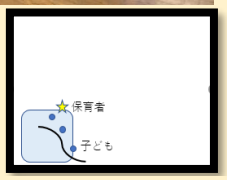
（2）保育場面の動画撮影（実際の子どもの姿）

事例　「すぐに助けてください！」9月10日

右下に示しているのは、保育室の図である。星が保育者、丸が子どもを示している。

場面①

登園してから、何人かの子どもがマットの上で電車遊びを始め、レールをつなげて、車を走らせる。



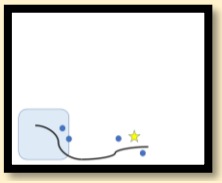
〈環境との相互作用〉

いつもと同じ場所に、慣れ親しんでいるマット、電車やレールなどがあることで、安心して遊びだせるきっかけとなっている。

場面②

登園してから電車で遊んでいたEが保育者と一緒に徐々にマットを飛び出し、レールを長くする。

部屋に用意しておいたレールを使い切ってしまったので、1ケース分追加する。すると、E「カーブでぐるっとあっちまで丸く！」と、もっとレールを長くしたいことを伝える。保育者が「お部屋一周できるかな？」と、Eと一緒にレールをさらにつなげていく。

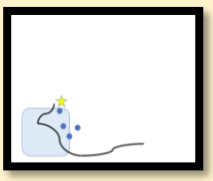


さらに、　E「レールまだあるけど」と、もう1ケース分のレールに気づいたので、保育者が追加する。新たに追加されたケースの中を見ながら、C「これ、スポーツカーじゃん！」B「あ！クレーンあった！」と、BとCは好きな車を見つけ、レールの上を走らせる。

その傍らで、Eが「もう一個カーブ！」と、レールを探し、保育者と一緒に長くする。

〈環境との相互作用〉

レールの数が十分にあり、広い空間があったことで、もっとレールをつなげたいというEの思いになっている。

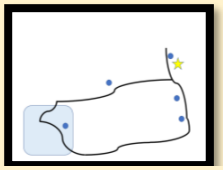


場面③

一方で、ｄはＢが救急車で遊ぶ姿を見ている。すると、ｄ「どこが病院だったんだっけ？」保育者「あれ？病院どこだっけ？」Ｂ「病院はここでーす！」保育者はレールをつなぎながら、ｃとＢのやりとりを仲介する。ｄは長くなってきたレールの途中に病院を作り始める。

〈環境との相互作用〉

救急車や建物などの遊具があったことで、ｄの病院づくりにつながり、ｄの遊びの楽しさを見つけることにつながっている。



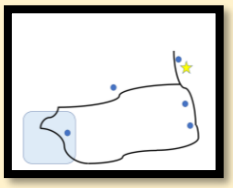
場面④

また、Ｆはケースの中から木の玩具を集める。Ｆ「いっぱい木持ってる！」保育者「Ｆくん、木たてちゃう？」Ｆ「どこに置こうかな？ここ！」と木を並べ始める。Ｆ「町がいっぱいあるじゃん」保育者はＦのやりたい遊びに共感しながら、見守る。

〈環境との相互作用〉

初めは車を動かして遊んでいたＦが、木の遊具があったことで、町づくり遊びを楽しむ姿になったと考えられる。

また、ここまでの遊びでは、保育者がその個々の遊びの世界を邪魔しない関わりをしていることで、子どもは個々の楽しさをみつけ、遊ぶ姿につながっている。



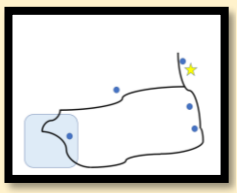
場面④の後、遊びの変化が見られる。

場面⑤

Ｂが人の遊具を持ち、レールの上に倒して置く。そして、保育者の方を見て、Ｂ「人が倒れています。すぐに助けてください！」と保育者に呼び掛ける。保育者「大丈夫ですか？」とレールをつなぎながら、Ｂの呼びかけに答える。

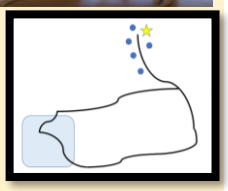
〈環境との相互作用〉

車を走らせる遊びをしていたＢだったが、人の遊具があったことで、ごっこ遊びを始める姿につながっている。



場面⑥

B「ピーポーピーポーピーポー」「病院に、助けに入りましょう！」と、今度はB自身が救急車になりきり、救急車を動かしながら、誰かを助けに行くことを楽しむ。保育者が「病院どこですか？」と聞き、d「病院はここです！」と、保育者はBとdの遊びをつないでいく。



そして、B「故障していました、パトカーが！」保育者「故障した人ここで直してください！」 F「ねえねえ、この車とかこの車とかさ、故障した」保育者「故障した車、ここで直しましょう。」と、救急車で誰かを助けるごっこ遊びから、乗り物が壊れて修理するというごっこ遊びが始まり、レールをつなげている保育者のところに集まってくる。

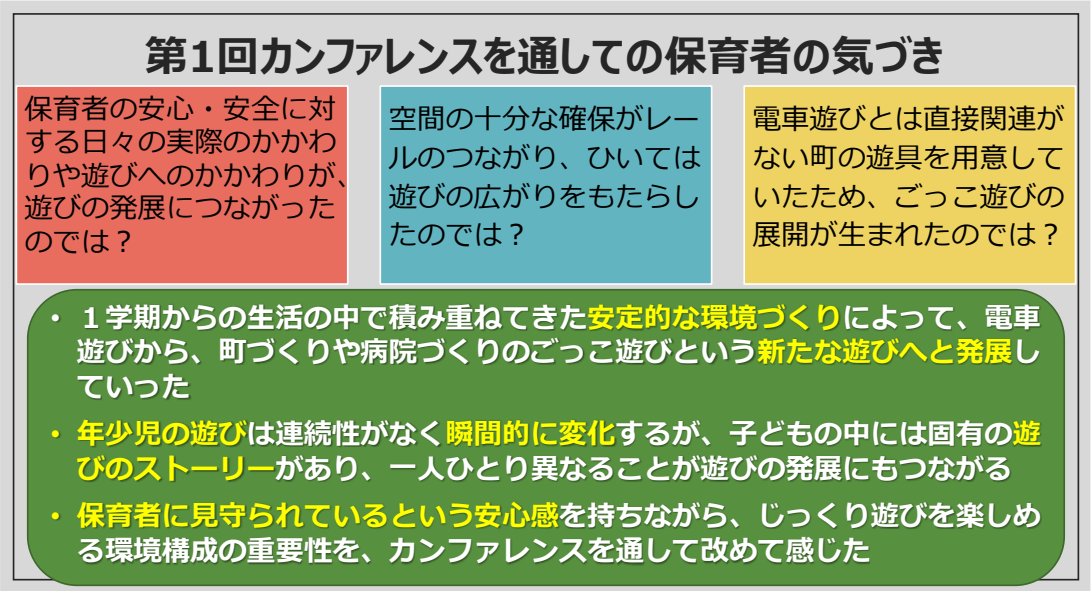
〈環境との相互作用〉

保育者は子ども一人ひとりの言葉に答えながら、ごっこ遊びの世界を一緒に楽しんだ。子どもの遊びがごっこ遊びに変化してから、保育者はそれまで個々の子どもの遊びの世界に共感し見守る関わりを、子どもの遊びのイメージをつなげる関わりへと変えている。このことが、子どもがごっこ遊びの世界に没頭できることにつながっている。

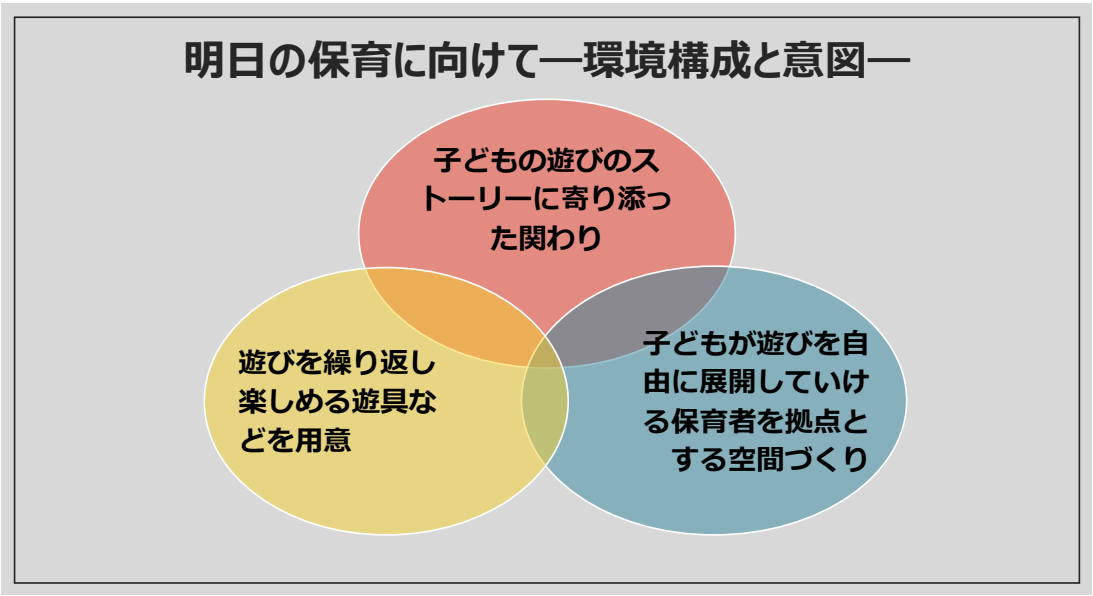
(3) 第1回カンファレンスの実施

上記事例を動画で見ながら、複数の保育者でカンファレンスを行った。第1回カンファレンスを通して保育者は次のように考えた。

1学期からの生活の中で積み重ねてきた繰り返し遊べる用具・教材などの用意、一緒に過ごしてきた保育者や友達の存在が近くにいることなど、安定的な環境づくりによって、電車遊びから、町づくりや病院づくりのごっこ遊びという新たな遊びへと発展していったこと、年少児の遊びは連続性がなく瞬間的に変化するが、子どもの中には固有の遊びのストーリーがあり、遊具の種類や遊ぶ場所、周囲にいる保育者や友達の存在によって、一人ひとり異なることが遊びの発展にもつながることに気づいた。そして、直接的な関わりだけでなく、子どもの遊びの世界に立ち入り過ぎずに、ものを増やしたり空間を広げたりして、子どもが保育者に見守られているという安心感を持ちながら、じっくり遊びを楽しめる環境構成の重要性を、カンファレンスを通して改めて感じた。



明日以降の保育に向けては、次のように考えた。



（4）第２回カンファレンスの実施

①その後の姿の共有

事例　９月 16 日(木)、17 日(金)

　登園すると、まずは電車で遊び始めるという子どもがいる。このような子どもの姿から、繰り返し遊べる電車遊びがルーティンになっている子どももいて、安心・安定して落ち着いて過ごすきっかけになっている。

　この後も、子どもの安心・安定につながり、繰り返し遊べるコーナーづくりを実践していった。

事例　９月１４日(火)

　保育室前の砂場で、チョコレートパーティというテーマのもと、ＡとＦは泥を作って混ぜること、ａとｂはコップや型抜きで形を作ることを繰り返し楽しんでいる。保育者は、それぞれの遊びに共感しながら、遊びの最後には「みんなで食べよう」と言って、遊びを終える。

　この姿から、保育室の外においても、子どもが繰り返しながらじっくり遊ぶ姿が捉えられる。繰り返し遊べる空間があり、その上で、保育者や友達と楽しさを共有している心地よさを感じられる関わりがあることで、保育室を離れても、安心・安定して遊ぶ様子が捉えられることがわかる。

事例　９月１５日(水)

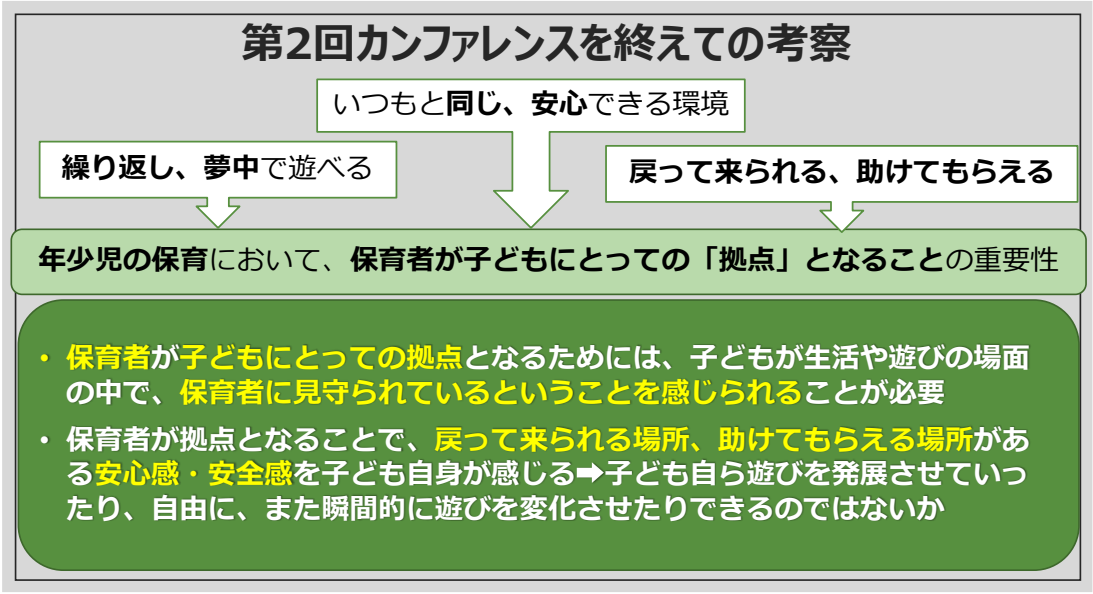
　ボール遊びが始まったので、保育者の提案でビールケース２つに樋をのせて、ゴールを作る。すると、Ｆが樋にボールをのせて転がし始めたことで、樋をつなげたコースづくりが始まる。

　コースができると、「水を流したら？」との子どもの提案から、水を流して楽しむ。最後は樋から漏れている水によって、下に泥ができ、泥遊びに発展していく。ゴールを作りから泥遊びへと変化し、瞬間的に変化する子どもの遊びの様子が捉えられる。また、前日の砂場コーナーと比べ、保育室からさらに離れた場所において、遊びをじっくり楽しむ姿が捉えられる。

　保育者は樋やビールケースを多く用意したり、瞬間的な子どもの発想に共感したりしながら、子どもの遊びのストーリーに介入しすぎずに周囲の環境を整えながら、援助していて、このような関わりが、子どもの安心・安定につながり、遊びのストーリーをもちながら遊ぶ姿につながったのだろうと考える。

② 保育の問い直し

第 2 回カンファレンスからは、次のような幼児理解と遊びの変化への気付きがもたらされた。

子どもの繰り返し、夢中で遊ぶ姿、いつもと同じ、安心できる保育の環境、戻って来られる、助けてもらえると子どもが感じる様子が、今回の実践を通して捉えられた。

そして、これら子どもの姿や環境づくりには、年少児の保育においては、保育者が子どもにとっての「拠点」となることが重要だとわかった。保育者が子どもにとっての拠点となるには、子どもが生活や遊びの場面の中で、直接的な関わりをすることと同時に、子どもの「今」の姿からものや空間を用意していくことで、保育者に見守られているということを感じられることが必要だと考える。また、保育者が拠点となることで、戻って来られる場所、助けてもらえる場所がある安心感、安全感を子ども自身が感じることで、それらを基盤として、保育者の見守りの中や保育者から離れた場所においても、子ども自ら遊びを発展させたり、自由にまた瞬間的に遊びを変化させたりできるのではないかと考える。